



北海道バスケットボール協会
指導者育成専門委員会

2007 / 12 / 29(土)

タクティクス (HBA指導者育成専門委員会ブログ)

NO. 12

2007年度インカレの状況

指導者育成専門委員会
札幌大学女子バスケット部監督
倉島武徳

今年度のインカレは男子が青山学院大学、女子は大阪体育大学（初優勝）がそれぞれ優勝し終了した。この大会を見て私を感じたことを述べてみる。男女別開催であったので、いずれもベスト4を決める準々決勝までしか見ていないことをお断りしておく。

最初に女子に関し1回戦を見て感ずることは、地方勢の台頭・レベルアップである。これにはいろいろな要素があると思われるが、1つは選手の分散がある。かなり有名な高校からそれまでの著名な大学に行くのではなく、地方の選手強化に力を入れ出した大学に進学するようになったと見られる。次に地方の大学でも指導者を確保できるようになったことである。

近年、政府の規制緩和政策に結果、文部科学省・農林水産省などの教職免許やその他の資格取得が容易になり、これを目指す学部・学科やコースを新設する大学（体育・スポーツ系だけではない）が雨後の竹の子のように開設され、そこに指導者や選手が集まり出したというわけである。

ベスト8に進んだのは、関東3校、関西2校、東海・九州・東北が各1校である。

技術的には進歩したとは思わないが、選手の質はスペシャリストよりはオールラウンダーが多くなってきたように感ずる。オフェンシブな面では、ポジションの特徴はあるものの、#5といえども3ポイントシュートを打ち、それを決める力がなければ使ってもらえないという状況になっている。特にシュートに関しては、インサイドシュートか3ポイントシュートに集中し、ペリメーターのシュートはかなり少なくなっている。また、ピックアンドロールからのオフェンスが圧倒的に多く、スクリーンアンドムーブが中心になっている。オフェンスでもムーブの多いものがよいオフェンスを作り出していた。

ディフェンスでは、コンビネーションディフェンスが多く、マンツーマンやゾーンのフルコートプレスが多用され、ハーフコートディフェンスではハーフコートゾーンプレスなども使われていた。しかし、なんとと言ってもマンツーマンディフェンスがメインであり、これが機能しないことにはやられっぱなしであった。

選手のサイズは、特に大きくなったわけではないが、リバウンドには常に3人が飛び込まなくては取れない状況であった。

一方、男子はベスト8を関東が独占し、関東の優勢が顕著になった。これは女子と全く異なる現象である。関西・東海・東北勢など昨年までベスト8に入っていた地区がことごとく敗退してしまったのが特徴的である。関東男子はリーグ戦から戦国時代で一つ間違えれば一気に2部に転落という過酷な状況から抜け出してきただけに、それなりの良いものを沢山持ち合わせていた。

それはサイズの問題ではなく、運動量・シュート力・ディフェンス力が総合して発揮されたときに勝利に結びついたと見た。選手の個人的な能力が非常に高く、基礎的な運動能力の高さ、ボールハンドリングを含めバスケットボールスキルの高さが目立った。ただしメンタル面での安定性に欠けていたり、大学生プレーヤーとしての認識欠如の選手も見ら

れ、NBA 気取りの態度を取るチームもあり不快感を与えた。ましてや明治大学の塚本コーチは大学のコーチとして如何なものかと思われるコーチであった。

攻め方としては、ピックアンドロールからのオフェンスが中心で、そこから直接ショットに結びつくことはなく、インサイドに一度ボールがフィードされ、その後にコーナーに飛ばしてショットというパターンが圧倒的に多かった。得点の 60%はこのパターンであった。

大きな選手を持っているチームが有利かという点、必ずしもそうはなっていなかった。象徴的なのはリバウンドで、リバウンドに跳んだ者の数が 3 人であれば、大きな者を凌駕していた。また、女子と同様にペリメーターでは強いプレッシャーに合いシュートを打てないということが顕著に見られた。男子のショットブロックはただ事ではなく、北海道のような「ゆっくりショット」は確実に叩き落とされるということである。勿論レイアップショットなどもアツという間に追いつかれブロックされるのである。北海道との力の差が大きいことが首肯される。

ただ、勇気を与えてくれたのは、新潟工業短期大学である。短大ではあるが北信越の第 1 代表となって出場したチームである。サイズは並であるが、動きの量の多さ、選手のバスケットボールスキルやセンスの良さ、そのことによるフルコートプレスの効果的であったことなどは、地方勢が嘆くには当たらないことを示してくれた。

目を転じて北海道の学生リーグを振り返れば、男子 1 部の 1 次リーグで混戦模様となり白熱した試合が多くなり、最終的な順位決定は同勝率で得失点で決まるような状態であった。同様に女子も最終週にならなければ、順位が決まらないという面白いリーグになった。

2 部以下も緊迫した試合が続き、リーグ戦を開催している意味が出てきたと思われる。さらに入れ替え戦では、下部のチームが頑張り昇格を果たしたのは賞賛したい。

しかし、総じて言うと北海道の学生バスケットは、あっさりバスケットであり、基本的な身体ができていない選手が多く、メンタルが安定していないのが特徴であろう。この点を各チームは改善しなければならないだろう。

また、これは選手だけのせいではないが、全国大会に出場したチームが苦しむのは、身体接触の可否の問題で、北海道の場合は全国水準の身体接触が許されないため、このハンディを克服しなければならない。この際、審判委員会も猛反省して全国水準の笛を吹いてほしいものである。因みに北海道から派遣されてインカレを吹きに来た審判は全国レベルで吹いていたが（過去何年も）、北海道では北海道レベルの笛になるのはどういうことなのであろうか。

HBA（北海道バスケットボール協会）指導者育成専門委員会